

## 束縛理論・語彙意味論の研究

著者	中村 捷
号	94
発行年	1994
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14510">http://hdl.handle.net/10097/14510</a>

なか  
中

むら  
村

まさる  
捷

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文 第 94 号

学位授与年月日 平成6年7月14日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 束縛理論・語彙意味論の研究

論文審査委員 (主査)

教授 鈴木 善三 教授 中 村 完

教授 平 野 日出征

## 論文内容の要旨

第Ⅰ部 束縛理論の研究

第1章 序論

第2章 代用表現…代名詞

第3章 優位条件と束縛原理(C)

第4章 Quantifier-Floating

第5章 Inverse Indirect Binding

第6章 Parametrized Extension of Binding Theory

第7章 Reflexives in Japanese

第8章 Japanese as a *Pro* Language

第9章 On “Null Operator” Constructions

第10章 On Structure-Preservation: The Basic Clause Structure

第Ⅱ部 語彙意味論の研究

第11章 語彙意味論

第12章 結果構文

第13章 中間構文

第14章 受動態の普遍的特徴

### はじめに

第一部で扱う束縛理論は、文中の要素間に見られる一定の関係を説明する理論である。その中には、照応形や代名詞にみられる相互指示の関係、遊離数量詞とその先行詞との関係、限量詞 (quantifier) とそれが束縛する変項との関係、移動した要素とその元の位置との関係などが含まれる。束縛理論は、Chomsky (1981) 以来活発な研究が続けられている分野の一つであるが、照応形に関しては、言語ごとに大きく異なる面があり、言語類型的研究が不可欠の分野である。特に、日本語は、英語と異なる照応形をもち、その研究は照応形の研究の発展に寄与するところが多い。移動に基づく束縛関係に課せられる制限や条件については、様々な研究が行われているが、各構文の特性を適切に記述し、さらに、それらの特性を一般原理からの帰結として説明できることが望まれる。

第二部では、語彙意味論の新しい枠組みを提示し、語彙意味論の方法、意味の原始概念、意味表示の特徴、意味表示に適用される意味規則などを明らかにすることによって、語の意味論に新しい視野を開拓する。本研究で提案する意味論の重要な特徴の一つは、意味論を意味を生成する規則の体系と捉えている点にある。意味生成規則という概念そのものは、すでに、Gruber や生成意味論で提案されているが、本論で提案する意味論は  $X'$  理論に基づく点が特徴的であり、生成意味論において主張されていたような統語論と直結するものではなく、もっぱら、語彙の意味にかかわる理論である。さらに、受動態や有標構文の機能と情報構造の関係などの問題も考察する。

## 第一部 束縛理論の研究

### 第1章

序論は、束縛理論の研究史点描である。束縛理論がどのように進展してきたのか、そして、それぞれの転機はどのようにして生じたのか、そのとき重要な役割を果たした資料や思考法はどうであったのか、束縛理論の現在はどうであるかなどについて述べる。

束縛理論は、Chomsky (1981) に始まるが、Huang (1983) によって accessibility の概念が照応形にのみ適用されるように修正され、一応の結果を見る。しかしこの段階の理論は、本質的には記述的で、説明理論とはなっていないと考えられる。最新の理論では、照応形を論理形式部門で移動することによって、その局所性、主語指向性などの問題を捉えようとしているが、この理論に対しても問題点が指摘されている。

### 第2章

代用表現の研究は、代用表現をすべて変形規則によって派生する理論から始まり、この理論に対する様々の問題点が指摘され、それらを克服するために、主として、Jackendoff (1972) によっ

て解釈理論が提案される。しかしいくつかの理由から、削除がかかわる代用形は、やはり削除変形で扱うのがよいとする提案が Hankamer and Sag (1976), Sag (1976) でなされ、変形・解釈折衷の理論が提案された。代名詞の研究で特に重要であるのは、Lasnik (1976) であり、それまで代名詞の研究で中心課題であった相互指示関係の指定という考え方を根本から転換し、代名詞に課せられる条件の本質は、何を指してはならないかという非相互指示であるとした点にある。これは、その後の束縛理論への道を開く一つの重要な理論上の修正であった。それまでの代名詞研究の成果は、Reinhart (1976) に結実している。

このような理論の流れを踏まえて、特に、代名詞について、従来行われていた代名詞化変形に対する反論、代名詞の分布を説明するための領域の定義、代名詞解釈規則としての非相互指示規則、不定名詞句と代名詞の指示関係などの問題について論じ、また、不定名詞句と代名詞の間にみられる関係の中で、従来の理論の例外とみなされていた donkey sentence と Englishman sentence に対して、間接束縛、逆間接束縛という新しい分析を提案し、束縛の仲介役をなす要素（間接束縛子）を考慮に入ると、従来の理論で認められている条件だけで、一見例外と見えるこれらの事実を説明できることを示した。なお、間接束縛の概念については、その後、Haik (1984) が同一の概念を提案している。

### 第3章

優位条件 (superiority condition) は、従来、変形規則の適用に課せられる条件として、あるいは、wh 語の併合 (absorption) に課せられる条件として述べられてきたが、いずれの分析においても、この条件が独立して必要な条件であるとみなされている。例えば、Lasnik and Saito (1992) が提案する併合の規則は記述的一般化に留まっていること、さらに、記述的にも妥当ではないことなど、これらの分析の不備を指摘し、優位条件を独立して必要な条件とみなす必要はなく、束縛原理(C)の帰結として説明できることを示した。

さらに、LF の移動規則は島の制約に従うことがないという事実に対して、これまでの説明と異なり、LF 部門には、wh 移動規制はなく、指標併合の規則だけが存在すると仮定することによって説明する。(最近 Chomsky (1992) もこの可能性を示唆している。)

### 第4章

遊離数量詞とは、本来それが修飾している名詞句から離れた位置に移動された数量詞を言う。例えば、次例の(b)がこれに該当する。

(1)a. All (of) the men picked up a glass.

b. The men all picked up a glass.

遊離数量詞と NP の関係を捉えるには少なくとも三つの方法がある。第一に、数量詞を変形規則によって右方へ移動する、第二に、VP 内主語の仮説に基づいて、主語を VP 内に生成し、数量詞だ

けを残してNPを移動することによって遊離現象を説明する。第三に、基底構造で両者を別々に生成し、その関係を解釈規則で捉える。第一の立場では、(1b)を(1a)から数量詞移動変形によって派生するが、この操作は要素を下方に移動するので適正な変形操作としては認められない。第二の仮説では、目的語の位置でも遊離数量詞現象が生じてよいとする誤った予測をする。そこで、(1a)と(1b)は、それぞれ独立に生成され、この両者の関係は意味規則で捉えられると分析する。また、遊離数量詞は、名詞の前に用いられる場合と異なり、個別的意味をもつことを指摘し、遊離数量詞の意味論にも踏み込んだ。

## 第5章

不定名詞句が代名詞を束縛するとき、その代名詞は、その不定名詞句の作用域内になければならないとする条件と、その不定名詞句が束縛する変項によって構成素統御されていなければならないとする二つの条件を満足しなければならない。ところが、この一般化に反する例が二つある。一つは、donkey sentenceであり、もう一つは下記のEnglishman sentenceである。

(1) The woman who every Englishman<sub>i</sub> admires most is his<sub>i</sub> mother.

every Englishmanの作用域は関係節の中だけであるので、hisはその作用域の中にはない。また、every Englishmanはhisを構成素統御していない。それにもかかわらず、every Englishmanはhisを束縛することができる。そこで、この文では、every Englishmanがwomanの値を決定し、そのwomanが仲介役になってevery Englishmanとhisの間に束縛関係が成立すると考えられる。この関係はdonkey sentenceの場合とまったく逆であるので、これを逆間接的束縛と呼ぶ。

## 第6章

代名詞、再帰代名詞などの照応表現の種類および分布は各言語において異なる部分と共通の部分がある。英語だけを対象として提案された束縛理論を他の言語に適用しようとする、当然のことながら、多くの問題点が生ずる。そこで、様々な言語に見られる照応形の特性を説明するために、従来の束縛理論にパラメーターとして、Accessibility Parameter, SUBJECT Parameter, Subject-Orientation Parameterを埋め込むことを提案し、これによって、日本語、ロシア語、マラヤラム語、アイスランド語に見られる照応形の分布および束縛関係の相違の説明を試みた。特に、マラヤラム語の照応形に対しては、統率子の主語、アイスランド語に対しては、Subjunctive chainという新しい概念を提案し、その特性を説明する。

## 第7章

従来、日本語の再帰代名詞は「自分」であると考えられ、これと英語のself形との同異が論じられてきた。しかし、日本語には「自分」の他に「自分自身」「彼自身」の表現があり、三つの照応形がある。これら三つの照応形の間には、その語形式と束縛関係に一定のエレガントな相互関係

がある。

	(A)	(B)
(C)	彼	自分
(D)	彼自身	自分自身

「彼」を含む(A)欄の表現は、先行詞を主語に限定する主語指向である必要はないのに対して、「自分」を含む(B)欄の表現は主語指向でなければならない。横の(C)欄の要素は長距離束縛が可能であるのに対して、「自身」を含む(D)欄の要素は局所的束縛に限られる。これらの照応形の諸特徴を説明するために、束縛理論そのものの修正および名詞類の素性体系の改訂を提案した。さらに、長距離束縛では主語指向性がみられるとする Chomsky (1986) の指摘と異なり、日本語では、この現象が見られないことを指摘した。なお、本論の事実観察を正しいと認め、Katada (1988, 1991) は、LF 移動規則によって、Progavac and Franks (1992), Progavac (1992) は Relativised SUBJECT の概念を用いて説明を試みている。

## 第8章

日本語では、文脈から意味が分かる限り、主語や目的語などが自由に省略される。このような現象を説明するために、Huang や Hasegawa は空のトピックを仮定する。しかしながら、この仮説には、多くの問題がある。例えば、この仮説に従うと、空要素は、島の中には生起できず主語・目的語の非対称性があると予測するが、これらの予測はいずれも誤りである。

対立案として、日本語の空範疇はトピックによって束縛される空範疇（すなわち、変項）ではなく、空の代名詞であると分析する。すなわち、日本語は空の代名詞を多用する言語であるという意味で「日本語は空代名詞の言語である」と言うことができる。このように考えることによって、日本語では補文、付加詞、関係節において、主語、目的語のいずれの位置でも空範疇が生じ、その空範疇が主語、目的語いずれによっても束縛可能であり、主語・目的語の非対称性がみられないこと、weak crossover の現象がみられないこと、これらの空範疇の分布が代名詞に課せられる条件に従うことが説明できる。

## 第9章

チョムスキーは、疑問文、関係節等 wh 移動が明示的にかかわっている構文に見られる一定の特徴が、tough 構文、too-to 構文、分裂文、話題化構文、寄生的空所構文等々に見られるとし、これらの構文には表面上は wh の移動は認められないが、wh 語に相当する空演算子が移動していると仮定する。このような分析では、上記の様々な構文間に見られる相違及びその構文に個別的特徴を正しくとらえることができない。そこで、これらの構文すべてに空演算子がかかわっているのではなく、tough 構文には空の照応形の移動が、too-to 構文及び目的節構文には PRO の移動が関与していると仮定する。このような分析により、例えば、tough 構文には、なぜ主語を越える移

動が適用できないか、なぜ時制文からの移動ができないのかを説明できる。分裂文、話題化構文では、焦点となる要素、話題化要素自体が移動していると分析する。この分析により、これらの構文には、いわゆる weak crossover 現象が見られないことを説明できる。空演算の移動がかかわる構文は、寄生空所化構文のみであることになる。

## 第10章

ルート変形と呼ばれる一群の変形規則は、構造保持変形ではなく、付加操作によって節の境界に要素を付加する規則であると考えられてきた。しかしながら、この種の変形規則だけがなぜこのような他の規則と異なる特徴を持つのか明らかではない。そこで、これらのルート変形も、実は、構造保持的であり、節の基本構造は、CP が IP を直接支配している単純な構造ではなく、CP と IP の間には、Topic Phrase, Focus Phrase が存在すると仮定する。そして、従来ルート変形となされてきた Topic 話題化変形は、Topic を Topic Phrase の Specifier (Spec-TopP) に移動し、焦点話題化は焦点を Spec-FocusP に移動し、否定辞前置は否定要素をやはり Spec-FocusP に移動する。Locative Inversion, Directional Adverb Preposing, Preposing Around *BE* などの規則は要素を Spec-IP へ移動する。

このように考えると、変形規則の操作はすべて構造保持となり、二種類の操作を認める必要がなく、移動された要素はすべて Spec-head の関係で認可され、また、これらの操作がなぜ文境界へ要素を移動するのか、否定辞前置において、なぜ倒置が義務的であるのか、などの問題を説明できる。

## 第二部 語彙意味論の研究

### 第11章

語彙意味論の枠組みを提示し、X' 理論の目標、意味要素の概念の定義および機能意味範疇と非機能意味範疇の区別、意味規則、二つの意味表示レベルの必要性、意味合成規則などについてみる。可能な意味と不可能な意味の区別を行う手段の一つとして、意味要素にかかわる選択制限を提案する。

意味生成規則という概念そのものは、すでに、生成意味論などにおいて提案されているが、ここで提案する X' 意味論は、語彙の意味論であり、生成意味論で主張されていたような統語論に直結する意味論ではない。この意味論は、(狭義の) 文法が非文と文法文の区別をするのと同様に、語彙意味論では、可能な意味と不可能な意味の区別をし、また、可能な意味規則の概念を適正に規定しなければならない。統語論が有限の規則によって無限に可能な統語構造を生成するのと同様に、語彙意味論は語の可能な意味を特徴づけなければならない。

### 第12章

結果構文を意味合成規則によって派生的に得られる構文であると位置付け、結果構文の諸特徴を

説明する。結果構文について説明すべき問題として、結果構文が V-NP-XP の連鎖をもつのはなぜか、結果構文に生じうる動詞の特徴は何か、動詞が使役の意味をもつのはなぜか、XP に生ずる要素の特徴は何か、NP と XP の間に叙述の関係があるのはなぜか、V-NP-XP の内部構造はどのようなになっているか、等々の問題に答える。これらの問題に対して、例えば、John shouted himself hoarse. の様な結果構文は、基底の意味構造 [ CAUSE [x CHANGE hoarse]] に shout の意味が合成された結果であると分析する。

従来の分析には、語彙使役規則、Theta 格子による分析があるが、いずれも結果構文に現れる動詞にその旨の情報を書き込んでおくものであり、結果構文にみられる生産性を正しく記述していない。意味合成は生産的規則であるので、結果構文の生産性を正しく記述できる。

### 第13章

中間構文とは、This book reads easily. のように、動詞の形式は能動態と同じであるが、意味は受動の意味を表わす構文を言う。この構文にかかわる主な研究すべてにおいて、中間構文は能動文に受動化と類似した操作を適用することによって派生されると仮定している。このような分析では、中間動詞がなぜ状态的であるのか、中間動詞が主語についての一般的、総称的特性を記述するのはなぜか、などの基本的問題にはなんら答えるところがない。そこで、中間動詞の諸特徴は、意味構造のレベルで適用される意味受動化規則によって説明されるとする新しい考えを提案する。これによって、中間構文に生起可能な動詞と不可能な動詞の区別ができること、中間動詞が状态的であること、一般的特性を記述すること、などの諸特徴が帰結として説明できる。

### 第14章

チョムスキーは、受動形態素をもつ動詞の過去分詞の特徴を次のように規定する。

(1)a. 主語の意味役割を吸収する。

b. 目的語に与えられる構造格を吸収する。

そして、これらの二つの特徴が独立して存在するのは疑わしく、格の吸収が受動態の本質的特徴であると述べている。これに対して、受動態の本質的特徴は主語意味役割の吸収であり、格の吸収は言語ごとに異なり、パラミター化されていると考える。この仮定によると、主語の位置に意味役割が付与されている受動態は存在せず、格の吸収に関しては言語ごとに異なり、(i)随意的に格を吸収する言語、(ii)可能なときには常に格を吸収する言語、(iii)義務的に格を吸収する言語、の三つの可能性が存在するが、事実これらの言語すべてが自然言語に存在する。

### 第15章

文法には、文を単位とする文文法と、文脈を考慮に入れた談話文法とがある。言語は一定の文法規則に従わない限り、言語としての役割を果たしえないのは言うまでもないが、文法規則に従いさ



えすれば、文法的な文になるかといえ、そうではない。文脈によって課せられる条件をも満足していなければならない。特に、いわゆる有標構文は、多くの場合、談話構造を整えるために用いられ、その際に、重要な働きをする要因の一つに文の情報構造がある。このような観点から、左方転移構文、話題化構文、tough 構文について、新情報・旧情報の観点から文頭に来る名詞句の性質について論じ、これらの構文は文頭に旧情報を担う要素を置くことによって談話の流れを整える機能を持ち、その帰結として、文頭に生じうる要素の諸特徴を説明できることを論じた。

## 第16章

本章では、リスト there 構文を新しい角度から分析する。通例の there 構文は、定名詞や固有名詞と共に起することはないのであるが、リスト there 構文にはこのような制限はなく、また、通例の there 構文には見られない「リストの読み」を表す。この構文について問題とすべきことは、第一に、この構文はそもそもなぜリストとか列挙と呼ばれる意味を持つのか、第二に、この文に現れる名詞句は新情報を持つが、そもそもなぜそうなるのか、第三に、この構文は談話を始める構文としては用いられないのはなぜかの三つである。そこで、リスト there 構文は、通例の there 構文と関係があるのではなく、むしろ it 分裂文と密接な関係があることを指摘し、この構文を there 分裂文として分析することによって、上記の諸特徴を統一的に説明できることを示した。

## 第17章

Seem は次の三つの型の構文に現れ、知的意味は同じであるが、それぞれ語用論上異なる用いられ方を示す。

- (1) It seems that he is sick.
- (2) He seems to be sick.
- (3) He seems sick.

これらの文は、意味上等価でなく、(2)、(3)は(1)と異なり、直接体験的判断を述べる場合に用いられる。換言すれば、(2)、(3)は、話者が直接観察したことについて述べる場面以外では不適切であることになる。さらに、(2)と(3)の間には、直接体験の度合の違いが見られ、(3)の方が、(2)よりも直接体験の度合が高いといえる。これらの意味上の相違は、seem の作用域の観点から捉えることができる。すなわち、(1)の作用域は文全体であるのに対して、(2)、(3)の作用域は、それぞれ、不定詞と形容詞であり、この違いが上記の語用論上の違いを引き起こしている。

## 論文審査結果の概要

本論文は、束縛理論を扱った第一部および語彙意味論を考察した第二部全十七章からなっている。

第一部第一章「束縛理論の研究」は、序論として束縛理論の研究史を試み、束縛理論の現在の問題点を指摘する。第二章「代用表現…代名詞」は、不定名詞と代名詞の間にみられる関係について、従来の理論では例外と見做されていた‘donkey sentence’と‘Englishman sentence’に対して、間接束縛、逆間接束縛という新しい分析を提案している。第三章「優位条件と束縛原理(C)」は、Lasnik and Saito (1992) が提案する併合の規則は記述的一般化に留まり、記述的にも妥当でないことを指摘し、優位条件を独立した必要条件と見做さずに、束縛原理(C)の帰結として説明できることを示している。第四章「遊離数量詞」は、遊離数量詞とそれが意味上修飾する名詞との関係を説明する三つの方法について検証し、遊離数量詞に対する変形分析の問題点を指摘しながら、併せて、遊離数量詞の意味論的アプローチの可能性をも示唆している。第五章「逆間接束縛」は、Haik (1984) が提案している所謂「間接束縛」の原理に対して、「逆間接束縛」と呼ばれる原理を提示し、さらに間接束縛に対する二重構造分析および逆間接束縛に対する再構成分析についての問題点を指摘する。第六章「束縛理論とパラミーター」は、束縛理論にどのようなパラミーターが必要であるかを論じ、そのパラミーター化された条件によって言語間にみられる束縛表現（照応形）の特徴の相違を明らかにしている。第七章「日本語の再帰代名詞」は、従来日本語の再帰代名詞は「自分」であると考えられ、これと英語の Self 形との同異が論じられてきたが、日本語にはこの他に「自分自身」、「彼自身」の表現と三つの照応形があることを束縛理論の修正と併せて提案している。第八章「Pro 言語としての日本語」は、Huang (1984) や Hasegawa (1984, 1984-85) の仮説に対して、日本語の空範疇はトピックによって束縛される空範疇すなわち変項ではなく、空の代名詞であると分析し、日本語は空の代名詞を多用する言語であるという意味で「日本語は空代名詞の言語である」と結論する。第九章「空演算子構文について」は、関係節・目的節・too to 構文・tough 構文・分裂などの空演算子構文について、これらの構文の間には、空範疇仮説では説明できない多くの重要な相違点があることを指摘し、さらに、空範疇の本質を明らかにしながら、これらの構文の類似点に対して自然な説明を与えようとする。第十章「文の基本構造」は、ルート変形と呼ばれる一群の変形規則について、なぜこの種の変形規則だけが他の規則と異なる特徴を持つかを明らかにし、この変形も、実は、構造保持的であり、節の基本構造は、CP か IP を直接支配する単純な構造でなく、これらの間には Topic Phrase, Focus Phrase が存在すると説く。

第二部第十一章「語彙意味論」は、意味生成規則の概念は、すでに生成意味論などにおいて提案されているが、ここで提案する X' 意味論は、語彙の意味論であり、生成意味論で主張されていたような統語論に直結する意味論でないことを明らかにし、さらに、統語理論が有限の規則によって無限の可能な統語構造を特徴づけるのと同様に、語彙意味論は語の可能な意味を特徴づけることを論証している。第十二章「結果構文」は、結果構文を意味合成法則によって派生的に得られる構文であると位置づけ、この構文についていくつかの特徴を説明している。第十三章「中間構文」は、動詞の形式は能動態と同じであるが、意味は受動を表す中間構文について、従来の統語的分析や項構造に基づく語彙的分析に対し、意味受動化規則によって説明されるとする新しい考えを提案して

いる。第十四章「受動態の普遍的特徴」は、Chomsky が規定する受動形態素を持つ動詞の二つの特徴に対して、受動態の本質的特徴は主語意味役割の吸収であり、核の吸収は言語ごとに異なり、パラミーター化されていると論じる。第十五章「英語有標構文の機能と情報構造」、有標構文は談話構造を整えるために用いられるが、その際、重要な働きをする要因の一つに文の情報構造があることを指摘し、そうした観点から、左右転移構文・話題化構文・tough 構文などについて論証している。第十六章「There 分裂文」は、リスト there 構文は、通例の there 構文と関係があるのではなく、むしろ it 分裂文と密接な関係があることを指摘し、この構文を there 分裂文として分析することによって、その特徴を統一的に説明できると論じている。第十七章「Seem の語用論」は、seem の三つの型の構文を取り上げ、それらが意味上等価なものではなく、直接体験の度合の違いが見られるとし、その意味上の相違は seem の作用域の観点から捉えることができると説いている。

以上のように、本論文は、束縛理論と語彙意味論を軸として、最近の言語理論の諸問題に正面から取り組み、斬新かつ独自の見解と仮説を提示した真に意欲的研究である。その研究成果には、他の追従を許さぬものがあり、今後この分野の研究の発展に寄与するところ大である。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。